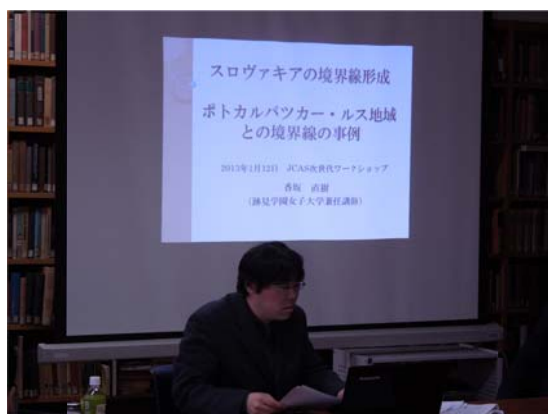


ワークショップ「地域の『対外的境界』と『内なる境界』—東欧と中国語圏をめぐる研究者の対話」（地域研究コンソーシアム「次世代ワークショップ（境界研究）」）参加記

2013年1月12日、東京外国語大学海外事情研究所にて、地域研究コンソーシアム公募企画「次世代ワークショップ（境界研究）」枠で採用された標題のワークショップが開催された。「次世代ワークショップ」の名前にあるように、若手研究者が企画から開催まで全てオーガナイズし、モラル・サポートを地域研究コンソーシアムが行い、資金面について北海道大学 GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」が支援するというフレームワークである。

本ワークショップは、中東欧と中国を専門とする若手地域研究者から構成される「エスニック・マイノリティ研究会」が主体となって開催された。右研究会は、異なる文化的背景を有する地域を研究する若手研究者が一堂に会して民族の問題という共通の話題を検討し合うという点が非常にユニークである。読書会と研究報告を交互に行う形で定期的に例会が開催されており、ニュースレターの刊行も行うなど、活発な活動を行っている。今回は、中東欧研究者が報告をして中国研究者がコメントをするという形式をとっていたが、過去にはその逆の形式でワークショップが開かれたこともあるそうだ。なによりも、修士課程在学中の本当に若い学生からベテランの先生方まで、参加者が平等かつ率直に自分たちの意見を言い合って議論している様子が印象的だった。

ワークショップは3つのセッションから成り、最後に総合討論が行われた。第1セッション「『対外的境界』の形成と再編—集団の境界概念を構成する論理」では、宗教・民族・言語の境界が複雑に入り混じる東欧地域における境界形成・再編の問題が扱われた。言語でもキリスト教宗派でも説明がつかないハプスブルク帝国下シレジア地方のポーランド系プロテスタント住民のアイデンティティ形成の問題（森下報告）、戦間期チェコスロヴァキアのポドカルパツカー・ルス地方における民族の境界（ルシン人かスロヴァキア人か）と行政境界の問題（香坂報告）、今日のモンテネグロ語形成とセルビア語との境界問題（中澤報告）が各報告の主題だった。中でも、森下報告は今日的な意味での民族的アイデンティティを自明のものとしてせず、19世紀シレジア地方のポーランド語話者のアイデンティティの複合性を解きほぐしていったという点で興味深い報告だった。



第2セッションは『内なる境界』の解消と再構築—社会統合の両側面」と題し、戦間期ハンガリーにおける体育政策を通じたネーションビルディングと「内なる境界」の解消（姉川報告）、第二次世界大戦期のハンガリー南部バラニャ県を事例とした強制移住・住民交換を通じた国家内部の単一民族化政策（山本報告）、社会主義期ユーゴスラヴィアの軍制における民族の問題（遠藤報告）が論じられた。各報告は、国家内部の内側の境界を解消すること（つまり、ネーションビルディング）がいかに模索され、どのような限界がそこには存在したのかについて明らかにするものだった。中でも、フィールドワークに基づく山本報告は、バラニャ県における複数の強制移住が相互に関連していたことを詳らかにしただけでなく、強制移住を断行した政権側の意図と実際に強制移住を目撃・体験した人々との間に存在する齟齬についても現場での語りから明らかにした。山本報告は、国家間関係、国家の政策、移住現場での語りという複数の地理的スケールに跨る境界現象の重層的性質を結びつけることに成功している。また、遠藤報告は、ユーゴスラヴィアでの軍制について論じ、人民軍の幹部と軍学校における民族構成を全人口の民族構成に近づけ、セルビア人以外の民族に対して「アフーマティブ・アクション」を講じたとした。ユーゴスラヴィアは連邦政府の権限が弱体な中で人民軍が象徴的な意味も含めて国民を束ねる役割を果たしており、その中で民族の問題に対する配慮がなされていたという論点は極めて重要である。同時に、このテーマでのソ連や中国との比較可能性を感じさせた。

第3セッションは『越境者』の境界意識—自己意識と境界との関係」と題し、各報告は越境者の語りや、越境をめぐる言説について分析している。ウィーンにおけるハンガリーからの亡命者による新聞紙上での語りと当時の中東欧での政治情勢との関連（辻河報告）、イタリア南ティロール地方のドイツ系住民に1939年に課された国籍・移住選択をめぐるこれまでの先行研究での言説の問題点（鈴木報告）、ポーランドからドイツへの亡命文学者とポーランド国内ドイツとの国境地域で興った多民族・多文化・多言語を称揚する文化運動との相互関係（井上報告）と、三者三様の報告がなされた。中でも、井上報告は、越境者の語りと境界地域での語りを相互の文化変容への影響関係からダイナミックに描いているのが印象的だった。

セッション終了後の総合討論は、博士課程在学中の2名の若手研究者がワークショップ全体に通底するテーマである中東欧でのネーションやエスニシティに関する問題提起を行い、数名の報告者がそれに対して応答し、最後に自由討論を行うという流れだった。中でも、討論者である山崎典子氏による、中東欧研究における分析概念としてのエスニシティの定義に関する問題提起は、異なる文化的背景を有する中国（及び中華文化圏）と中東欧の地域研究を架橋する上で重要な論点だと感じた。

自由討論では、筆者による発言も含めて、本ワークショップではネーションやエスニシティの「実態」について議論が多く割かれたが、現実にはこれらは分析概念に過ぎず、また、複合アイデンティティの一部を構成しているに過ぎないことが指摘された。多民族・多宗教・多言語で、かつ、国民国家を創り上げる中で行政境界が頻繁に引き直された中東

欧地域だからこそ、ネイションやエスニシティの境界に対して学術的関心が集中することは理解できる。しかし、同時に、いかなる地域においてもアイデンティティは常に複合的である。エスニックな境界にせよそれ以外にせよ、bordering は日常的に行われ、現実には目に見えずに緩慢に bordering のプロセスが進んでおり、それが一定の閾値を超えるとある瞬間に目に見える形で暴発してしまう。よって、境界を研究対象とする場合、まずその境界が、自明のもの、所与のもの、固定的なものだという考え方を捨てて、たとえ緩慢であっても歴史の中で常に動いているということを意識する必要があるだろう。そして、このような緩慢で漸進的な歴史的な「プロセス」をきめ細かくフォローしてゆくこと、これが境界研究における歴史研究者の責務であり、また、強みであると感じた。このような境界研究における歴史研究者の「立ち位置」を考えさせられたという点で、個人的に本ワークショップは非常に有意義だった。

前述のとおり、本ワークショップは、中東欧地域に関する報告に対して中国研究者がコメントをするという形式をとった。コメントの多くは、コメンテーターが専門とする地域で報告と類似する事例を紹介して報告内容と比較するというものだった。このような対話をつうじて、自らの研究を地域研究の中だけに押し留めるのではなく、より広い文脈の中に位置づけるきっかけがもたらされたと言えるだろう。しかし、同時に、比較や対話だけではもったいない。なかなか難しい部分もあるが、世界史的な意味での時代性や文脈などより深い歴史的な議論ができる素地もあるように感じた。今後は、例えば、同時代の境界現象を扱う複数の異なる地域を専門とする歴史研究者によるセッションを行うということも考えられるかもしれない。いずれにせよ、様々な可能性を感じさせるワークショップであり、大いに刺激になった。今回のワークショップの成功を心から祝福すると共に、まずは、『境界研究』誌でワークショップの豊かな成果を世に問うてもらいたい。

地田 徹朗 (GCOE 学術研究員)

ワークショップ

地域の「対外的境界」と「内なる境界」——東欧と中国語圏をめぐる研究者の対話

プログラム

2013年1月12日(土) 10:30~17:30
東京外国語大学海外事情研究所

総合司会：松岡 格（早稲田大学アジア研究機構研究員・EMS 研究会^{*1}代表）

10:30~10:40 開会挨拶・趣旨説明：辻河 典子（東京大学大学院博士課程・EMS 研究会副代表）

10:40~12:00 第1セッション：「対外的境界」の形成と再編—集団の境界概念を構成する論理
司会：小林 亮介（日本学術振興会特別研究員・EMS 研究会副代表）

報告者：

森下 嘉之（日本学術振興会特別研究員・EMS 研究会副代表）

近代中東欧のマイノリティと宗派—帝政末期シレジアにおけるポーランド語話者の福音派を例に—

香坂 直樹（跡見学園女子大学兼任講師・EMS 研究会企画委員長）

「スロヴァキア」の境界線形成—ポトカルパツカー・ルス地域との境界線の事例—

中澤 拓哉（東京大学大学院修士課程）

「それでも、差異はあるのです！」—現代モンテネグロの言語イデオロギーにおける〈言語〉の境界と〈地域〉の再編—

コメンテーター：茂木 敏夫（東京女子大学教授）・小島 敬裕（京都大学地域研究統合情報センター研究員）

13:00~14:20 第2セッション：「内なる境界」の解消と再構築—社会統合の両側面
司会：吉村 貴之（東京外国語大学AA 研^{*2}研究員）

報告者：

姉川 雄大（千葉大学特任助教）

戦間期ハンガリーの体育政策における国民化—リベラル・ナショナリズムの挫折と権威主義化—

山本 明代（名古屋市立大学准教授）

第二次世界大戦期ハンガリー・バラニャ県における強制移住と住民交換

遠藤 嘉広（東京大学大学院博士課程）

社会主義期ユーゴスラヴィアの軍内部での民族間関係

コメンテーター：小林 亮介・土肥 歩（東京大学大学院博士課程）

14:40~16:00 第3セッション：「越境者」の境界意識—自己意識と境界との関係
司会：森下 嘉之

報告者：

辻河 典子

第一次世界大戦後の中欧における言論空間の断章—『ウィーン・ハンガリー新聞』を手がかりに—

鈴木 珠美（東京外国語大学研究員）

南ティロールにおける国籍・移住選択（1939年）から見るドイツ系住民の地域アイデンティティ

井上 暁子（北大スラブ研究センター GCOE プロジェクト「境界研究」共同研究員）

境界認識と自己意識—ドイツ在住ポーランド人作家と地域の関係を通して—

コメンテーター：松村 智雄（東京大学大学院博士課程）・松岡 格

16:30~17:30 総合討論

司会：松岡 格

問題提起：持田 洋平（慶應義塾大学大学院博士課程）・山崎 典子（東京大学大学院博士課程）

閉会の挨拶：香坂 直樹

※1—エスニック・マイノリティ研究会の略称

※2—アジア・アフリカ言語文化研究所の略称